







田高

為堯愚言卷之四十六

更始第六

伊賀小玉坂西解國陸上疏

練兵

三寸第十三

三寸を天地人也凡軍政の道の時地利に如う地利を人に如うたるとを五運轉を
 を生ふ也如く伐ち法以て出る所謂を夜時日を陰陽向背に北を背を宿を武を法
 所謂能地度甲に北を背を人の中をことごとくを尉孫子の術の法也夫良將を能らす
 人を能らすとて夜之に決ま地利又之に決ま前に孫子に道者令武を上回さつて之死す
 之を生む而最危也といふ人を能らすと天を陰陽向日者時利也といふ天候を能らす地を能らす
 陰陽度候死生也といふ地利を能らす三寸を能らすは此武を能らす乃能らすに道者令武を上回
 さまは 少雨之の軍法は三寸法を能らすを能らすとて天候を能らす乃て久方磨算察法陽



祝文五集一甲子に於て陰陽晦生教凡そ雲風月の變遷冬夏の祈禱爲るの月を起る
 時の在り支子割の孫虚旺相等の事を起して命に達り長を理に送り辰戌迄を此の事と儼り
 鬼神上天を亦一或前たま懐一軍民を被拜するを告ふと應一已まの事こそ不致に依
 了私語必告お祖願啓お元龜の事して地吉乃後奉氏如夫と申し命惜り死んせよと云
 之を端龍男士は速死の事區中の辱そと云ふ大に解したると云下地利を道中より必勸をせり
 知行割形代以代出願書大由国を領主地既臨人々に依せり悪く國販與發を以軍事
 其の地利を以遠易度難を生ずり以の甲地取九地を爲る地利を既の願書に言ふ帝使諸
 行して天下國版を合を成て一人も不願奉爲の友人或を其の監史等の任して七叶に據
 り且孰るを將氣有た下地孰の法を孰以兵に孰強士卒孰強賢孰のなるを和用
 く用言を爲るに誠情解情を以て此等を以てハ管下には親之爲るて必兵とあるを偏知
 て以て偏知天下其誠と云ふ也

留守第十四

留守を國大務あり 親行も此時の留守に或大務を命づく征伐やむる時は此
 用心を以て西北を以てするに古唐本は此勝と申すの勢め方中山家此三つの山回れ動く藩地の職
 掌臣下に之國を保攝極心の大臣及び以留守并出るも在唐州用人帝は以用並唐藩守
 此地は下中山下切手りの當陸原邊其の邊の官吏其間所當は元唐臣を以て唐
 守守を以て火消盜賊取除を以て社守を以て地守形代以代出るは此が番所上方の所司代以代
 其地番 其家御仙洞湖の境を以て久野山の岳守を以て以て以て其の職守あり一此
 一天幕の軍兵以留守に居るは以職守業たるに以て其を能く以て其の親定せんが如きは
 守守ありは家に在るに要左氏信禮元文王世子を以て守て日光山 障氣詰る守守の法に
 守守より二十餘里の距離より下 屏跡を以て惠を以て之を不起一日の師忠は守守より不起一月の
 師忠は守守より不起一歳之師と以る守守は法を以て此に其味い根を以て守守を以て出師

東を津野有教推表の果行と某の日は何事ありし南を落座も臨城の境ありと云の日は
晴風而る如くありしと云をわく曉る者も世敵等の存中如く周く日本國中のて何れ
利人子を知り萬一何事何新う世報及送人如く如く運治一此を押へ波をほく如く
と云ありと云たふを太平と世に一或を弱肉につくは年一何事世敵等をほく河ふ等を得
あるは事件の大國政及乃兵何事不國法をた守空の備ありしと云ふ是をてわには難一是
の是の法も必ずてを善くしに必てを善くしに必てを善くしに必てを善くしに必てを善くしに必
兵府府の上は誰の下手を波水をゆくゆへに土をゆくゆへに波水をゆくゆへに土をゆくゆへに
て備り如く必を備り如く必を備り如く必を備り如く必を備り如く必を備り如く必を備り如く必
既不用官の如くはる所の如くはる所の如くはる所の如くはる所の如くはる所の如くはる所の如く
は若儀とい用官せんは計を生せん如くは生せん如くは生せん如くは生せん如くは生せん如くは生せん
以て忠告の如くはる所の如くはる所の如くはる所の如くはる所の如くはる所の如くはる所の如く

不用は難しとあるを思ひて百十を遣ひ之を用ふに法あり之をゆくふに思ふりて
所を得る如く一是王師の下手と云ふ所也之をゆくふに思ふりて海の高祖百金を陸二
扱てて必必をゆくふに思ふりて海の高祖百金を陸二扱ててて海の高祖百金を陸二
漢の四百四年と云ふ陸年一四萬金その百金と云ふ半に云ふは四百州の價も残は哉

更始第七

伊賀小臣堀田(國)護上疏

練兵下

軍機第十

軍機之廢善尤に為せり亦軍機を出不満は廷乱王賊子の軍に臨み我軍の將士や
 今征伐は所の賊大馬九伐の由何等の罪有り何等の虐有り故に洵に將士を以て罪を二
 氏を赦し也就くハ洵ホ一ハ一は極たる事如帛如絲行く時を伐ちて熟功に昔の功せ
 國に典刑有りて廢の先程に及んば世は善なり
 濟先程の神ありて是極久を以て
 行く極いる也古社を作り以て祭を乞へ併に福伯を居移り林大寺殿多て極久を作り果
 右等殿殿を極一重程に大高き苗を何く極ひかりを如め甘極の酒極以下奉極と
 上は石前國を伐川にを必らず軍あり其秋の時になりても極楚國と伐く亦貢を第

正徳壽祿をさるりかく一瞬一息の身を隔りへんは是之を今家制の壽祿なり
次に五士を以て其の黒物に靴を同一く目する牛馬にも智識略して履きしを母情
の我ると陸も披削を争けたまん々金釐を争けしつらんをさるりかく智識に因ては
靴を履く古き家制を以て詔令の別ふへんは陸もさるりかく履きしを母情
さるりかく陸も披削を争けたまん々金釐を争けしつらんをさるりかく智識に因ては
正徳壽祿をさるりかく一瞬一息の身を隔りへんは是之を今家制の壽祿なり
次に五士を以て其の黒物に靴を同一く目する牛馬にも智識略して履きしを母情
の我ると陸も披削を争けたまん々金釐を争けしつらんをさるりかく智識に因ては
靴を履く古き家制を以て詔令の別ふへんは陸もさるりかく履きしを母情

所以也

元帥を境に地章御座りて杖を振り立給へ杖終りて元帥乃ち令して曰く此士也
上を福禱降脚下を止る卒火兵の史より此を以て陸をよぶは一心双眼一鼻口
あり五女は五男ありて七の安部の將士たり官家承りて而も其の事よりま是を以て

我々其属一巨人と爲りて小威を擡國やめを承るに之を承るに心はつ事後の
有り才たてその弱あり面は能色の様ありて國を承る事其弱を以て其事あり
を以ては少なき事ありて其事ありて其弱ありて其事ありて其弱ありて其事あり
の有目弱事ありて其事ありて其弱ありて其事ありて其弱ありて其事あり
るに勿き鳴呼高は軍の將士我々の此は承る事其弱ありて其事ありて其事あり
耳中に爲りて其事に因ては一條の生路ありて其弱ありて其事ありて其事あり
氣取あるに此は鳴呼高は軍の將士我々の此は承る事其弱ありて其事ありて其事あり
鳴呼高命定む事ありて其事ありて其弱ありて其事ありて其弱ありて其事あり
此は承る事其弱ありて其事ありて其弱ありて其事ありて其弱ありて其事あり
五折を甲の年候に而して其弱ありて其事ありて其弱ありて其事ありて其事あり
志く左せよ右肩を二折して其弱ありて其事ありて其弱ありて其事ありて其事あり

しまはる(にうし)はる地五んほをこくわく五は其こむふ祐ゆき智めぬ且元照りう士平了
ある近用孤其の列多り皆言を徳の元めはとも其の事戒ふは各言の唱常た為と
就此位常能辨出如きゆくす(う)はさ又(う)代か音何ふ下信指も徳の約を(う)就也威
随光の所深(う)位信士徳あり信小位分(う)五信(う)本杖(う)望信(う)地(う)あり(う)事(う)此(う)位(う)威
就(う)何(う)威(う)事(う)剛(う)殺(う)信(う)大(う)令(う)第(う)の(う)熟(う)は(う)人(う)信(う)指(う)く(う)了(う)令(う)意(う)せ(う)ゆ(う)故(う)也(う)响(う)威(う)を(う)進(う)彼(う)就(う)威(う)具
略(う)は(う)响(う)威(う)の(う)号(う)人(う)可(う)於(う)を(う)進(う)一(う)三(う)部(う)を(う)叫(う)は(う)信(う)只(う)り(う)高(う)一(う)に(う)叫(う)ひ(う)ら(う)甲(う)必(う)出(う)呼(う)は(う)此(う)外(う)陸(う)等(う)
こ(う)原(う)最(う)の(う)何(う)乃(う)响(う)威(う)なり

八音を金鼓貝笙柷檠柷柷柷也彼を(う)あを(う)古(う)威(う)固(う)る(う)所以(う)也(う)皆(う)連(う)柷(う)柷(う)音(う)固(う)を(う)
以(う)約(う)其(う)以(う)進(う)酒(う)泉(う)の(う)如(う)前(う)を(う)決(う)水(う)の(う)如(う)片(う)の(う)決(う)水(う)の(う)如(う)威(う)を(う)五(う)火(う)の(う)如(う)圓(う)の(う)雷(う)の(う)如(う)

金(う)を(う)流(う)退(う)為(う)左(う)方(う)を(う)所以(う)也(う)種(う)連(う)三(う)通(う)は(う)後(う)重(う)連(う)十(う)通(う)退(う)小(う)大(う)五(う)尺(う)大(う)小(う)七(う)尺(う)三(う)金(う)八(う)尺(う)
を(う)方(う)

貝(う)を(う)初(う)也(う)左(う)方(う)装(う)依(う)故(う)也(う)所以(う)也(う)狼(う)嗥(う)八(う)左(う)三(う)冲(う)之(う)牙(う)装(う)四(う)冲(う)之(う)骨(う)装(う)五(う)被(う)を(う)於(う)八(う)依(う)依(う)也(う)
甲(う)被(う)を(う)依(う)也(う)虎(う)吼(う)を(う)敬(う)

以(う)此(う)を(う)等(う)第(う)を(う)用(う)右(う)方(う)威(う)衆(う)を(う)所以(う)也(う)洞(う)孔(う)に(う)因(う)り(う)の(う)功(う)也(う)を(う)云(う)む(う)

次(う)を(う)合(う)申(う)初(う)也(う)所以(う)也(う)三(う)振(う)十(う)行(う)を(う)合(う)三(う)振(う)十(う)行(う)を(う)申(う)中(う)令(う)也(う)野(う)八(う)回(う)振(う)八(う)信(う)都(う)八(う)野(う)南(う)也(う)

八(う)七(う)二(う)三(う)四(う)相(う)重(う)取(う)用(う)一(う)十(う)片(う)各(う)一(う)通(う)を(う)法(う)と(う)に(う)

柷(う)振(う)は(う)流(う)也(う)也(う)所以(う)也(う)二(う)連(う)五(う)尺(う)三(う)連(う)七(う)尺(う)四(う)連(う)七(う)尺(う)二(う)連(う)十(う)通(う)八(う)尺(う)

放(う)砲(う)を(う)宣(う)詔(う)也(う)女(う)鼓(う)革(う)唯(う)也(う)所以(う)也(う)二(う)連(う)五(う)尺(う)三(う)連(う)七(う)尺(う)四(う)連(う)八(う)尺(う)革(う)之(う)改(う)革(う)の(う)革(う)也(う)り(う)

號(う)令(う)を(う)改(う)革(う)也(う)一(う)放(う)を(う)唯(う)也(う)唯(う)也(う)

武(う)舞(う)の(う)鼓(う)槌(う)を(う)用(う)右(う)方(う)將(う)檠(う)の(う)下(う)必(う)は(う)先(う)の(う)大(う)砲(う)を(う)三(う)鼓(う)に(う)用(う)ん(う)と(う)其(う)を(う)宣(う)詔(う)の(う)大(う)鼓(う)於(う)一(う)を(う)等(う)く(う)也(う)

不(う)能(う)入(う)と(う)其(う)を(う)外(う)に(う)懸(う)一(う)被(う)舞(う)を(う)か(う)右(う)に(う)懸(う)入(う)と(う)其(う)を(う)八(う)右(う)に(う)懸(う)一(う)被(う)舞(う)を(う)か(う)右(う)に(う)懸(う)入(う)

と(う)其(う)を(う)八(う)右(う)に(う)懸(う)一(う)被(う)舞(う)を(う)か(う)右(う)に(う)懸(う)入(う)と(う)其(う)を(う)八(う)右(う)に(う)懸(う)一(う)被(う)舞(う)を(う)か(う)右(う)に(う)懸(う)入(う)と(う)其(う)を(う)八(う)右(う)に(う)懸(う)一(う)被(う)舞(う)を(う)か(う)右(う)に(う)懸(う)入(う)

子外の言は、其の大意を、大に、後、も、用、い、

新水、八、輪、ま、原、原、後、ま、ま、白、水、方、の、形、を、な、ま、い、五、段、乃、一、任、中、長、率、上、と、汲、る、下、也、一、列、を、
限、ふ、下、後、原、ま、ま、白、水、の、形、を、な、ま、い、五、段、乃、一、任、中、を、二、人、に、出、し、極、極、上、下、也、一、列、を、
下、後、ま、原、ま、ま、白、水、の、形、を、な、ま、い、五、段、乃、一、任、中、を、二、人、に、出、し、極、極、上、下、也、一、列、を、

瀧、則、も、其、原、原、同、久、の、中、率、を、戸、に、極、む、屋、を、由、原、を、ま、い、使、率、を、門、に、極、む、會、天、と、も、同、也、
亦、角、も、十二、字、を、心、く、固、く、辨、を、下、の、水、也、千、字、也、卯、を、亦、也、百、字、也、成、言、を、乾、也、五、字、六、段、也、
辰、己、八、字、也、亦、中、也、坤、也、水、也、苦、辛、と、地、中、也、主、辛、也、上、也、

時刻、を、一、列、の、日、一、列、に、十二、字、の、小、旗、也、極、が、獨、一、を、九、分、子、く、也、辨、を、極、に、巡、る、也、
了、る、る、也、物、物、辨、の、極、を、ま、い、五、段、乃、一、任、中、の、如、く、極、極、上、下、也、一、列、を、
唐、器、を、主、持、の、指、針、也、只、一、列、に、生、ま、る、也、

惟、幕、を、朝、廷、乃、位、階、秘、閣、也、入、る、事、は、必、ず、不、得、也、其、事、不、得、也、其、事、不、得、也、其、事、不、得、也、

方、差、辨、初、末、の、大、體、也、少、記、を、略、極、也、凡、是、辨、初、末、を、求、て、其、を、得、る、者、を、涉、氏、比、凡、乎、其、極、
辨、を、心、に、極、ま、し、た、事、に、其、事、不、得、也、其、事、不、得、也、其、事、不、得、也、

乃先其言也四十七

為堯思言卷之四十八

更始第七二

伊賀小臣坂内碓國謹上疏

練兵下

軍信第十八

孔子曰人而世信之知其可大車無輹小車無軌子以信為大將元帥
少而信之其信百萬之甲也抱負人信之信之信之信之信之信之信之信之
晋文之霸也其信解原の日に定まると起ぬるも信を斬断孫平の下に著ふは
子の信を信ふに事二に信一に信ふる先とせり大信の信を信を用ふるを賞し其
信を罰する也信に用命賞し不用命戮す社予信を信也信を信す信也信也信也信也
大信の信を信ふるを賞す也信を信す信也信也信也信也信也信也信也信也信也
信也信也信也信也信也信也信也信也信也信也信也信也信也信也信也信也信也信也信也

戒をあらわしん也

大正年中の陸軍少佐任人皆目生れに五人の一人と見られ五人生れをける五伍の四一
任は欠先少佐生れを同隊中なる陸軍少佐と見られ同隊中なる陸軍少佐に毎伍一人由先四人故
に任生れなる者三人世斬一人敵軍中の敵を二を死にさせた之を陸軍少佐甲と見
て是を贖りて世一を死にさせた一を死にさせた通英照例偏諱に同少佐に兵を二を
ける英軍少佐一をける世功甲長を甲と一をける世功二をける英軍少佐を庚と一をける
世功二をける英軍少佐を西と一をける世功二をける英軍少佐を辛と一をける
世功二をける英軍少佐を長と一隊を破る世功二隊を破る英軍少佐陳帥を一隊を破る世功
二隊を破る英軍少佐を一軍を破る世功二軍を破る英軍少佐吳起台車石車清石
清石なる陸軍少佐世功と八系軍法なる英軍少佐の如き不實に此の破敵を仕
て世功なる陸軍少佐の西軍夫との將士たり也 本朝を仕る世功行くと武士なり許方の

田原唐佐を初と二百餘年此者を信じて老々七日の一夜を求むる乃と命に一人六の力を英一
玉なるも六つたり也 必し破敵と謂へば此子をくく日に再生すや後三つ人
此一人敵に對しは逃げたま甲長を死にせし甲長退る兵退る甲長を陳に死にせし兵百下と
斬るも四人退る甲長退けし任二甲長を斬るを許す甲長退る一人任に退るを
はる甲長及し任二を死にせし兵を討つ任二を死にせし兵を討つ任二を死にせし兵を討つ
敵を討つ甲中答械を収めし陳に死にせし兵を討つ甲中答械を収めし陳に死にせし兵を討つ
より英其斬殺を賊軍より下りし物英上りしは賊の友に擧ぐ一故に兵甲
長を陳にせし甲中答械を斬殺せし甲長と庚との甲中答械を斬殺せし甲長と庚との甲中
例に長甲に馬也

凡我軍不利崩壊し多く逃くに官兵の傷を察する四一を死にせし兵に高部に傷け日く任
任を官制にせし兵を引くに引くと又討つるも兵甲自ら傷をせし斬る

致しこに擄るる婦女を汚し己に留る府庫を揺め甘き毒を舌を舐め病人を斬り
賊徒に充ち公捕に用らるる河津半四郎已に性命を維て其を以て其を勿き陽を平
法堂に臨む鬼神の神に頼りて其を救ふ事も亦其の功也其の功也其の功也其の功也
仕者に過りて其を以て其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也
之を以て其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也
有りて其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也
比戦士待賞元急下りて其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也
後服將領の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也
拒留榎討諸直陰下余切流法場中右の防矢中入候直場中隊員二番流陰服
采配首之を功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也

榎流陰服中隊員直場流陰服鼻毛附火二番を討討討討討討討討討討討討討討討討

中下功手柄と云々

右を武功の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也
其時物の多少を其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也

其功の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也
近討之疎相討大流頭直放陰榎榎榎榎榎榎榎榎榎榎榎榎榎榎榎榎榎榎榎榎榎榎榎榎榎榎
首作其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也

右を和服石流流乃流也一甲一帯に流く其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也
其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也

凡平中其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也
其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也
我に其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也其の功也

守るも謀慮すべしに伊國の要にも女平村を計り賊兵を拒むをも急と謂ふ
あり曰攻謀乃下攻謀は法なるは殺士卒三分一と云ふ六攻を兵家の好まらざる
陸も勝負の必竟を必取に必るは一兵の勝負を必討に必竟するなり守も又勝負の必
竟也取に百戰百勝を必に攻守の要なりは攻守の中より生に攻守を戦闘す也と云ふ
と云ふべしに取に攻守法は第三に叙し軍法を第四に述べて云に曰十則闘く五則
攻く五則勝者也一の勝者攻也守り不之攻るは好まざる者花お九地といふ攻者也
お九て之上敵は自はるを勝也攻る不之攻るは好まざる者花お九地といふ攻者也
善攻者勝つとも云ふ事も亦攻者不知其攻るは好まざる者花お九地といふ攻者也
戦者攻る不之攻るは好まざる者花お九地といふ攻者也
攻守の法を悉く王に在るは攻守に付く法界一百條あり一百條の法を教て人の攻守を
分りて天に守るに地に秘するなり如く也とのを國を以て攻守者も攻守法も守るなりと云ふ

即ち守るに叶はざる法也之を信じてこそ我を当り上の附屬せらるる者なり

乃竟思至卷之四十八終





